

(4枚)

本店 記者レク概要

日時：平成23年4月19日(火) 11:30~12:15

場所：東京電力本店本館1階101AB会議室

先方：40名(カメラ7台)

当方：原子力設備管理部

広報部

配付資料：

- ・東北地方太平洋沖地震による影響などについて【4月19日 午前9時現在】
- ・福島第一原子力発電所 1~3号機プラント状況 等
- ・福島第一原子力発電所モニタリングカーによる計測状況 等

質疑：

Q. 2号機は二重扉から入った所からさらに奥へは行けなかったということか。

A. 二重扉に入ってから数メートル程度まで入域した。

Q. 2号機原子炉建屋の奥まで行けなかったのは線量が高かったからか。

A. 湿度が高く、カメラが曇ったことで先へは行けなかった。

Q. 1、3号機と比較すると2号機原子炉建屋の線量は全体的に低いと言うことか。

A. 一部分のデータを測定しただけなので、現データのみでは何ともいえない。

Q. 2号機は炉内が損傷している可能性もあるのに線量が低いのはおかしいではないか。測定結果の信頼性はいかがか。

A. 1、3号機と同様に測定して出た結果である。データ結果については今後評価していく。

Q. 蒸気の影響で誤判定したのではないか。

A. 現時点でそこまで評価できていない。

Q. 再度ロボットによる調査予定は。

A. 今回のデータもふまえ、今後検討していく。本日の調査予定はない。

Q. 二重扉付近の線量は4mSv/h だったが、この値を持って建屋全体の線量もわかるということか。

A. あくまで1地点のデータである。

Q. ロボットが撮影した画像について解説いただきたい。

A. 1号機：北側二重扉付近からの撮影。奥のバー状の物はMCC（分電盤の一種）と思われる。瓦礫が何かはわからない。

2号機：中央に見えるのはMCCと思われる。配管が何のためのものかはわからない。

3号機：光っているのは大物搬入口。ねじれた鉄板状の物は何らかの構造物が落ちてきた物と思われる。

各号機とも有意に水が溜まっているという状況ではない。

Q. 地震発生以降、原子炉建屋内を確認出来たのは初か。

A. 1号機は3/12午前9時半頃、2号機は3/14午後6時頃に入域している。3号機はいつ頃まで入域していたかは確認出来ていない。

Q. 1号機の瓦礫は3/12の時点ではあったのか。

A. 確認できていないが、地震か爆発の影響で発生したと思われる。

Q. 湿度が高く曇ってしまうことでロボットが先まで進めないのであれば、ファイバースコープや使い捨てのロボット等を使えばよいのではないか。

A. 可能性はあると思うが、まずは人が作業できるかどうかの確認が目的であり、ロボットが先に進めないようであれば人も入れない環境だと考えている。

Q. NISAの情報によると、1台のロボットがもう1台のロボットの背中にある線量計を確認して測定するとのことだが、曇っているでは確認出来ないのではないか。どのように測定したのか。

A. 確認させていただく。

Q. 4/17の事前測定では二重扉の外側が12mSv/hなのに、4/18のロボットのよる測定では4mSv/hとなっているが、扉の外より内の線量が低くなっているのはなぜか。

A. 確認させていただく。

- Q. 今回のロボットによる調査は目標を達成したといえるか。
- A. 原子炉建屋内の状況を少しでも確認したいという観点では、初期の目標を達成したと考えている。今後は、人による作業が出来るかどうかといったこと等をデータから評価してまいりたい。
- Q. 水蒸気が発生していて湿度が高いということは何が起きていると考えられるか。
- A. 2号機に関しては圧力抑制室が損傷していると想定できる。また、建屋内へパスが出来ていれば、約86℃ある圧力抑制室から蒸気が漏れ出ているという可能性が考えられる。
- Q. 2号機は次にロボットが先に入るのか、それとも人が先にはいるのか。
- A. 少なくとも、全面マスクを被って人が入れる様な環境ではない。今後、評価してまいりたい。
- Q. 地震直後に原子炉建屋内に人が入ったとのことだが、その際に撮影した写真は無いのか。
- A. 高圧注水系の稼働状況の確認等の目的で入城していたので、写真は撮っていないと思う。当時の作業員からの聞き取り情報などがあれば紹介させていただく。
- Q. 炉内にモニターなどはないのか。
- A. モニターはたくさんある物ではない。
- Q. 燃料(ペレット)が溶融している可能性があると言及されたが、東電としてはどのように考えているのか。
- A. 被覆管がもろくなって損傷し、水素が発生した可能性は考えられるが、ペレットが損傷したというデータもなければ損傷していないというデータもない。
- Q. 確度の高い判断データはないのか。
- A. ペレットが損傷していることを裏付ける情報はなく、何ともいえない。
- Q. 燃料が損傷していることを確認した時期は。
- A. 水素爆発が発生したことから燃料損傷による水素発生の可能性は考えられる。

- Q. 高濃度用の仮設タンクがあれば使うとのことだが、これまではなぜ使用しなかったのか。
- A. これまで仮設タンクは徐々に設置していくと説明してきた。現時点の計画では高濃度のタンクを7月頃になれば準備できると考えて進めているところ。詳細については引き続き検討していく。
- Q. 3号機のタービン建屋、トレンチのたまり水の処理はどのように考えているのか。
- A. 本日は2号機の移送についてお知らせしたもの。1、3号機については引き続き検討していく。
- Q. 3号機のたまり水の線量分析もすべきではないか。
- A. 各プラントの状況に応じて検討していくので、今すぐには実施するとは聞いていない。

以上

ERC各班 E 左記班  
班内各位

\* 東電プレス会見録に  
修正が入りました

会見概要

日時：4月19日（火）18:30～20:30  
場所：東京電力本館3階A日C会議室  
先方：記者60名（カメラ11台）  
当方：原子力立地本部  
原子力設備管理部  
原子力運営管理部  
本店広報部

- ・ 福島第一原子力発電所の状況
- ・ 東北地方太平洋沖地震による影響などについて【4月19日 午後4時現在】
- ・ 福島第一原子力発電所2号機取水口付近からの放射性物質を含む液体の海への流出について（続報15）
- ・ 福島第一原子力発電所敷地内における空気中の放射性物質の核種分析の結果について（第二十五報）
- ・ 福島第一原子力発電所付近の海水からの放射性物質の検出について（第二十七報）
- ・ 福島第一原子力発電所タービン建屋付近のサブドレンからの放射性物質の検出について
- ・ 福島第一原子力発電所 プラント関連パラメータ
- ・ 福島第一原子力発電所モニタリングカーによる計測状況 他
- ・ 福島第二原子力発電所モニタリングによる計測状況
- ・ 飛散防止剤散布実績（4/1～4/19）と予定（4/20）について
- ・ 柏崎刈羽原子力発電所の排気筒などにおける微量な放射性ヨウ素の検出について（続報）

冒頭、 から各資料の説明について説明。

質疑：

- Q. 本日、2号機トレンチから集中環境施設へ移送した水の量はどのくらいか。
- A. ポンプのスペックが10m<sup>3</sup>/hで約10時間運転しているので100m<sup>3</sup>程度移送できていると思う。
- Q. 6号機タービン建屋たまり水を復水器に移送したとはどのようなことか。
- A. 建屋内に地下水が染み出しており、緊急避難的に移送したもの。

Q. ふくいちライブカメラで18日の6, 8, 10, 17時に白煙が上がっていたがどのような状況だったのか。

A. おそらく使用済燃料プールから蒸気が出ていたと思われる。

Q. 蒸気に揮発性の放射性物質等は含まれているのか。

A. 多少は含まれていると思われる。

Q. 白煙が出ていることを公表していただけないのか。

A. ホームページ等でお知らせしても良かったかもしれない。ご意見としていただく。

Q. 2号機の原子炉建屋の湿度が高い理由はどのように考えているのか。また、工程表への影響は。

A. カメラが曇ってはつきりと確認できなかったが、一部高温の水等が湯気となって建屋内に充満している可能性がある。また、工程表は打ち出したばかりで、これから詳細を詰めているところ。

Q. 湿度が高いのは圧力抑制室から湯気が出ている可能性もあるのではないか。

A. 可能性はある。

Q. ロボットの写真によると、3号機の大物搬入口から光が見えたが、そこから放射性物質が漏れているのではないか。

A. 空気の流れとしては外から内か、内から外か、その時の天候次第と考えている。少なからず出入りはあると考えている。

Q. 大物搬入口はすぐに閉めないのか。

A. 最終的には閉める必要はあるが、物資の搬入等を考慮すると開けておく必要性もある。

Q. アレバ社に水の浄化システムを発注した経緯は。

A. アレバ社から高濃度の水処理のノウハウをご提案いただいたのでお願いしたところ。

Q. 今後、ロボットの調査は継続していくのか。また、別のフロアも見ていくのか。

- A. 今後のロボットによる調査の予定は、とりあえず中に入って二重扉の内側を見ただけなので、今後の計画は検討中だが、線量が高いので、まずはロボットを使っていくと思う。また、階段も上れるので範囲を広げられればと考えている。
- Q. 2号機の線量が1、3号機よりも低い理由として考えられることは。
- A. 原因は分かっていないが、1、3号機は水素爆発があったことの影響もあるのではないかと考えている。
- Q. 集中廃棄物処理施設について、事前に耐震性を検討したとのことだが、どのように実施したのか。
- A. 従来から用いているSSを用いて評価している。
- Q. 集中廃棄物処理施設に対する本震の影響度については、目視点検を実施したということか。
- A. 止水工事等、水の受け入れに対しては目視点検により、現時点で問題ないと考えている。
- Q. その他の建屋の耐震性は何に基づいて評価していくのか。
- A. NISAとも相談していくが、SSを基準にしていくと思う。
- Q. 一部SSを超えているがどうするのか。
- A. 一部見直すと思うが時間がかかる、まずは今のSSで評価する方が早いと思う。
- Q. サブドレンの放射能濃度が変化する理由は。
- A. 雨水の流入によって薄まる場合や、飛散した放射性物質が周辺の土壤に染みこみ、濃くなる場合もある。
- Q. シルトフェンスの内側の海水やサブドレンの水を処理していく予定は。
- A. シルトフェンス内側の海水についてはこれからの検討となるが、サブドレンの水については基準値を超えているので、最終的には処理してまいりたい。
- Q. ロボットが曇って奥まで進めなかったことについて、改良等は検討しているのか。

A. まずは一度入ってみたという段階なので、今後、どれだけの可能性があるか検証していく。

Q. 今後、格納容器に水に満たす場合、耐震性についてはどのように考えているか。

A. 並行して検討していくが、現状で燃料を浸ける程度の水を満たしたとしても耐えられると考えている。

Q. アレバの水処理施設として、どのような物を検討しているのか。

A. 高濃度の放射性物質の処理に用いる予定。アレバ社としてラ・アーク等で実績がある。6月頃には稼働させたいと考えている。

Q. 比較的低濃度の水は仮設タンクに移送されると聞いているが具体的な工程イメージは。

A. 仮設タンク、メガフロート等が考えられるが、いつ、どの水を入れるかは具体的には決まっていない。

Q. 処理した水は炉心や使用済燃料プールで再使用すると言うことか。

A. そのように考えている。

Q. 処理した水は一旦、タンクに貯めてから炉内等へ入れるのか。

A. 詳細は決まっていない。

Q. 処理能力ほどの程度か。

A. 1200m<sup>3</sup>/日程度は処理可能と考えている。

Q. メガフロートへの移送は低濃度の汚染水を考えているのか。

A. サブドレンのように外の環境と同程度の水についてはメガフロートに入れることになるのではないかと考えている。

Q. 10:23 に外部電源工事を終了したとのことだが、昨日の電源終了工事とどう違うのか。

A. 昨日お知らせした内容は「予定」であり、10:23 が工事完了の実績である。

Q. 2号機の水の移送について、地下水位を管理しようとしているとのことだが、移送後の水面からどれくらい上の位置に地下水位を持ってこようと考



えているのか。

A. タービン建屋地下1階の床面の水位の+50センチ上を地下水位にしたいと考えている。

Q. 4号機は140トン放水予定とのことだったが、40トンにした理由は。

A. 本日は天候不良のため、40トンで終了している。

Q. 1号機への窒素封入について、圧力が増えていないのは温度が下がっている可能性があるとのことだが、どの辺の温度を測っているのか。

A. ベロシール部、給水部等、徐々にではあるが下がってきている。

Q. ベロシール部の温度は信頼性がないとのことではなかったのか。

A. 温度の絶対値の信頼度は低いかもしれないが、傾向として下がり傾向になっていると考えている。

Q. ボトム部の温度は変化がないが、

A. ボトムの温度に変化はないが、圧力容器全体の傾向として下がり傾向になっていると考える。また、注入している窒素そのものも40~50度なので、下げ傾向の要因ともなっているのではないかと考えている。

Q. 高濃度の汚染水は元々仮設タンクに入れられないと聞いていたが、新たに高濃度の物を入れられるタンクを見つけられたのか。タンクがあったのであれば、集中廃棄物処理施設の水を海へ流さず、2号機から直接仮設タンクへ移送すれば良かったのではないか。

A. これから高濃度の汚染水を移送できる専用のタンクを設計、製造していくことを前提で考えている。

Q. アレバの水の浄化システムに実績があるとのことだが、どの程度の濃度の水を処理した実績があるのか。

A. 具体的には把握していないが、ラ・アークに再処理施設を持っており、セシウム等の放射性物質を処理しているという実績があり、今回お願いした。

Q. どの程度の水が処理できるかわからないということか。

A. 今後アレバ社様と相談し検討してまいりたい。

Q. 2号機の原子炉建屋内の蒸気について、圧力抑制室から出ている物であれ

ば、線量が低すぎるのではないか。

A. ご指摘の点もあるかと思う。まずはルート等の解明を見つきたい。

Q. ヨウ素 131、セシウム 134、セシウム 137 の主要3核種以外の再評価の進捗状況は。

A. 近々公表できると思う。

Q. NISAの情報によると、ペレットが溶融している要因としてテクネチウムやランタン等が検出されていることを理由に挙げている。東電はそれらを確定種として扱っていないのか。

A. テクネチウム等が検出されていることは既にお知らせしている。それらの量 (Bq) がどの程度だったか現在、再評価しているところ。

Q. 窒素封入において、ドライウェル圧力の目標値はあるのか。

A. 当初、初期値+100kpa と考えていた。量としては6000m<sup>3</sup>程度になるのではと考えていたが、190kpa 程度で頭打ちとなり、思ったよりも窒素が抜けているのではないかと考えている。引き続き燃料の冠水を目標として窒素ガスを注入し続けたい。

Q. 工程表を公表されたが、台風等、天候の影響はどのように考えているのか。

A. 天候の影響についてはリスクとして意識している。例えば原子炉建屋に布をかぶせるような作業などは大きく左右されると考えている。それらのリスクも含めて6ヶ月という工程を出させていただいている。

Q. JCOの事故の時もいくつかの機関がロボット開発をされたと思うが、また、産総研等でもロボットはあると思うが、どのような検討をされてアメリカ製のロボットを活用するに至っているのか。

A. 検討を進めてきた結果、二重扉を自分で開けて入っていく、キャタピラ仕様で写真を撮ってくるという観点等からアイロボット社の物を選んだもの。

Q. 格納容器内の配管等には亀裂等が想定されるが、水を増加することにあわせて修理はしないのか。また、修理する際、格納容器内まで入らないとできないものなのか。

A. 格納容器に水浸けにしていくということは簡単なことではなく、フランジ部や配管からリークしていくことは想定している。まずは破損箇所を見つけながら対処方法を検討していく必要があると考えているが、人が格納容

器の中に入ることは大変だと思う。格納容器の外から配管を改造して水を出し入れしていくこと等を検討していくことになるのではと思う。

- Q. 水を張りながら途中で漏れを見つけるということになると高濃度の水が漏れてそれを確認するという順になるので、水を入れる前に漏えい箇所を見つけて修理方法を検討してから水を張った方が汚染度は低くなるのではないか。
- A. 図面などをもとに事前に破損が想定されるような箇所は止水剤等で補修していくことを実施した上での対処であると考えている。
- Q. 2号機の圧力抑制室の損傷が激しい場合、コンクリートを詰めるということも検討されていると思うが、その際、格納容器内に入らないでも作業はできるのか。
- A. 圧力抑制室の外側に空間があるのでそこからコンクリートを注入できると考えている。抑制室内に入るのは難しいことで、外側をコンクリートで埋めるということである。
- Q. 集中廃棄物処理施設の止水工事完了とのことだが、津波対策はどうか。
- A. 現在、移送ホースのみが扉を通過している。現時点での津波発生時には、移送ホースが通過している部分海水が入ってくる可能性はあるため、将来的にはホースの通過部分の面積を小さくしたいと考えている。
- Q. 作業員の被曝線量が500mSvに引き上げられることが話題となっているが、いつから引き上げられるのか。
- A. 当社は線量を500mSvに引き上げることは認識していない。
- Q. 作業員の医療体制について、被曝線量によっては白血病等のリスクが高まってくると思うが、先月下旬に、虎ノ門病院があらかじめ造血肝細胞を採取、保存する技術を造ったので活用してほしいと言っていたが、現状、東電での活用状況はどうか。
- A. 自己末梢血管細胞の保存については、そういった話があることは承知しているが、これは250mSvを大きく超える被曝をする際に効果があると考えているが、現時点では250mSvでの管理の中で適切に行っていきたいと考えている。
- Q. 気象庁の地震予知情報課が、震度4や5弱でも6~10mの津波がくる可能性

があるといっている。東京電力が管理するすべての原子力発電所でのどのような対応をしているのか。

- A. 現時点で津波の対応は改めて実施する必要があると考えており、KKのように運転中の発電所では、津波が襲ってくることを前提に、予備電源車の確保や消防車、必要な電源ケーブルやホース、海水系のポンプの予備等を準備して対応している。1F, 2Fでも同様に対応している。

Q. 津波対策については公表しないのか。

- A. KKでは公表済み。1F, 2Fはプレス発表の実施はしていないが、このような会見の場で紹介させていただいている。特に1Fは余震時に50分間原子炉への注水が停止したこともあり、電源の多重化や消防車や電源車を高台へ移動することなどは実施済みである。

Q. 以前にお願いをしていたバックアップ体制も含めた、オペレーションフローの人員配置図を公表していただきたい。

- A. どのような形で出せるかについて検討していく。

Q. 6号機タービン建屋の溜まり水を復水器へ移送したとの発言があったが、移送前の5, 6号機の復水器の状況はどうだったのか。

- A. プラントが停止した状態を維持していたので、通常レベルである600~700tは入っていたのではないかと思う。空き容量があったので、地下からしみ出した水を100t程度移送した。

Q. 1号機DW圧力をSCが上回るような状況になっているが、この状況をどのように認識しているか。

- A. 現時点では、この値の評価までは出来ていない。

Q. ロボットの写真が提供できて、動画が提供できないのはなぜか。

- A. ロボットはいったん高線量のエリアに入っており、機器そのものが汚染しているので取り出しに時間がかかっている。実際に我々もまだ録画内容を確認できていない状況にある。内容を確認させていただいたうえで、提供させていただきたい。

Q. 5, 6号機の復水器へ移送した地下水の線量は。

- A. 表面線量で4  $\mu$ Sv/h程度。

↳ 議事メモの誤記修正

正) 4  $\mu$ Sv/h

誤) 4 mSv/h

Q. 海に放出した水も同様に、あまり高い線量ではなかったということか。

A. 放出限度を超えている水であることは確かである。そもそも外にダイレクトで出せるような水ではない。

Q. 当時、復水器へ移送しようとした判断しなかったのはなぜか。

A. 当時もタービン建屋から復水器への移送も行うなど、そのほか活用できる物は活用して対応した。

Q. なぜ復水器が満水になるまで移送しなかったのか。

A. 確認したいが、どこにどのような水があるかの確認や非常用DG冠水の恐れなどの緊急度によるものではないか。

Q. 非常用 DG を直ちに冠水させる水を放出したのではなく、冠水させる恐れのある水の流入元を排出したということか。

A. その通り。

以上